

SOAに基づく全体最適なシステムを実現 日立製作所の「Cosminexus」

企業を取り巻く環境の変化に適応するには、業務プロセスを柔軟に構築できるITインフラが必要だ。これを実現するものとしてSOAが注目されており、すでにその導入を始めている企業も見受けられる。日立製作所の大場 みち子氏は、ITアーキテクト・サミット 2007 Winterのセッションの中で、全体最適を目指すためのSOA実践のアプローチについて詳しく説明した。

SOAに基づく 全体最適なシステム構築

経営スピードを増大させるには、本来ITシステムが大きな役割を果たすべきだ。しかし、現実には逆の場合が多く見られる。

セッションの冒頭、大場氏はこの問題に触れ、「現状のシステムの多くは業務ごとに個別最適化されており、全体から見ると非効率な状態だ」と指摘した。

この問題の解決策として、SOAに基づくシステム全体の最適化が必要となる。日立では、全体最適を実現するために、新規／既存双方のシステムを「インタフェース統合」、「プロセス統合」、「情報統合」の3つの処理形態で統合するアプローチを提唱しており、同社の統合システム構築基盤「Cosminexus」によってそれをサポートしてきた。さらに、そのガイドラインとして、SIノウハウを体系化した「リファレンスアーキテクチャ」と「適用ガイド」も提供している(図1)。

全体最適化を支援する 2つのガイドライン

リファレンスアーキテクチャとは、業務課題に応じて、SOAによるシステムの実現パターンを定義した「システム・パターン」を文書化したものだ。一方、適用ガイドとは、システム設計／構築における指針などを体系化したものである。この2つのガイドラインによる方法論は、個別の課題に対して適用できるため、パターン適用の効果を実感しながら、段階的に全体最適化を図れるのが特徴だ。

大場氏は、その適用例としてERPパッケージと連携したSOAの構築事例を取り上げ、対話ワークフローとメッセージ・フローの連携に関する実行方式などを説明した。対話ワークフローとメッセージ・フローは、「プロセス統合」の実現パターンである。前者は、作業員間の連携をシステム化するものだ。後者は、複数のシステム間連携を自動化するようなケースに適用

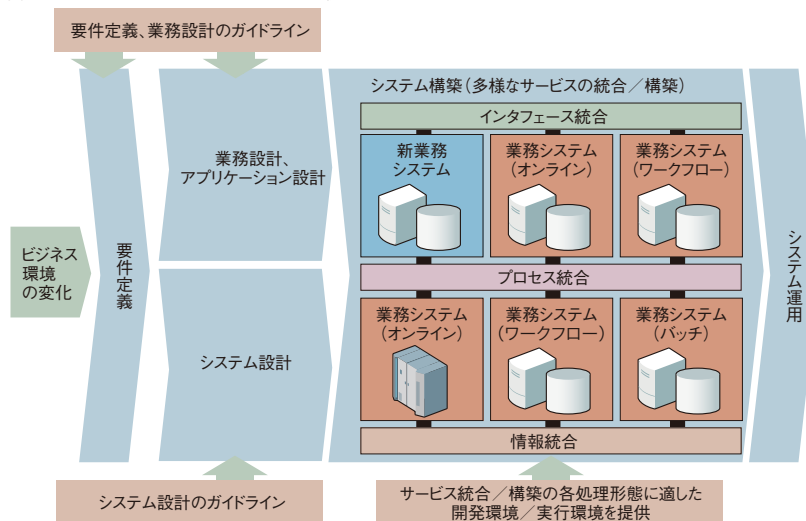


リファレンスアーキテクチャと適用ガイドの利用手順を説明する大場氏

し、その実現方式としてBPEL (Business Process Execution Language for Web Services)を利用する。これらによって、「対話ワークフロー業務からメッセージ・フロー業務、既存システムの連携までを段階的に構築することで、全体最適を実現できる」(大場氏)という。

そのほか、セッションでは、実際に全体最適化を目指したデモンストレーションも紹介された。また日立では、システム・パターンを用いたSOAの導入方法を解説するセミナー(<https://www.open-middle.com/seminar/soa/>)も開催している。SOAによる全体最適化を推進するうえで、同社は強力なパートナーとなるだろう。

図1: Cosminexusのコンセプトと3つの処理形態



HITACHI
Inspire the Next

問い合わせ先

株式会社日立製作所
ソフトウェア事業部 販売企画センター

〒140-8573
東京都品川区南大井6-26-2 大森ベルポートA館
☎03-5471-2592

URL <http://www.cosminexus.com/>
問い合わせフォームURL <https://websign.hitachi.co.jp/soft/ask/products.html>